前組羽根倉遺跡出土珠文鏡について

中井　歩

1．はじめに

古墳時代の日本列島では多くの銅鏡が古墳に副葬された。その生産や流通には政治的な動向が関係していたとされ、当時の日本列島の社会動態を明らかにするために多くの研究が重ねられている。

埼玉県内では古墳時代の銅鏡が約40面確認されている（東松山市教育委員会2015）。全国的にみると出土数は決して多くないが、稲荷山古墳出土の画文帯環状乳神獣鏡や東松山市の三角縁神獣鏡など、埼玉県の古墳時代を考えるうえで非常に重要な資料が含まれている。そのなかで本稿では埼玉県児玉郡神川町に所在する前組羽根倉遺跡で採集された鏡を対象に、その生産と流通について若干の考察を行う。また、出土地等の詳細は不明ながら、前組羽根倉鏡と類似する銅鏡が埼玉県立歴史と民俗の博物館に所蔵されている。この鏡についても合わせて報告したい。

2．前組羽根倉遺跡出土鏡（第１図左）

前組羽根倉遺跡は1981年５月に坂本和俊氏によって珠文鏡１面と管玉２点が表採されたのを契機に発掘調査が実施された。その結果、６基の方形周溝墓が発見され、珠文鏡は第２号方形周溝墓の上部から表採されたことが判明した。第２号方形周溝墓は7.94m×7.08mで、断面U字形の溝によって周りを囲まれている。方台部の中央に埋葬主体部があるが、副葬品は見つからなかった。また、周溝には３つの長楕円形の土壙が存在する。珠文鏡の表採地点はその土壙のひとつの上方であった。珠文鏡の採集状況からこれらの遺構との関係性を断言することは難しいが、隣接する第１号方形周溝墓の周溝内土壙から勾玉と管玉の破片が出土していることを考慮すると、珠文鏡も第２号方形周溝墓の土壙に伴う可能性が想定される（前組遺跡発掘調査団1986）。

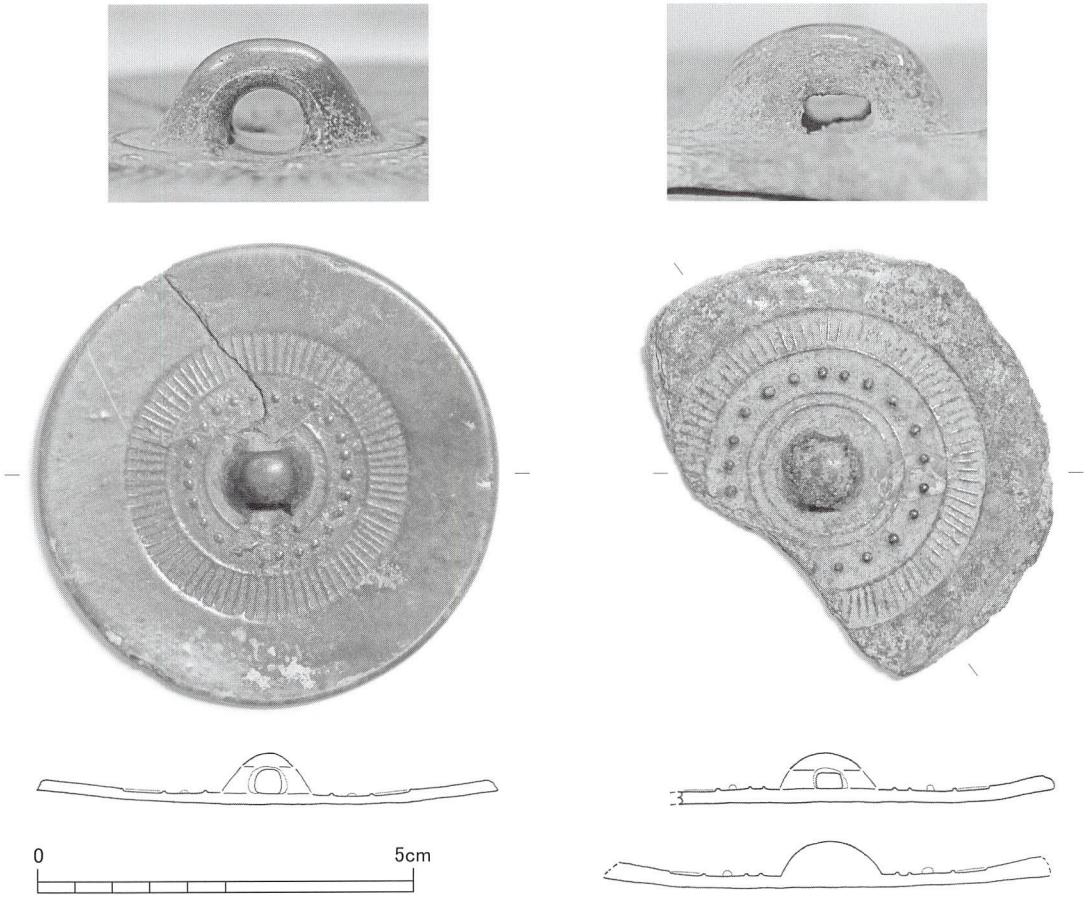
珠文鏡の観察所見は『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』（以下、報告書）で詳しく記述され、その後塩野博氏によっても紹介されており（塩野2002）、重複する部分も多いが今回筆者が実見することで得られた所見を以下に記す。

一部に外区から内区にかけて大きなひびが入っているものの、ほぼ完形であり、文様も明瞭に確認できる。鏡面・鏡背ともに深緑色を呈しており当時の色調は不明だが、銅質・鋳上がりは良好である。面径は6.1cm、厚さは内区が1.0mm、外区は1.5mmである。外区は平縁で、縁部は丸みを帯びている。外区の反りは1.5mm程度で顕著ではないが、凸面鏡である。鈕は径1.25cm、鏡背面からの高さが0.5cmの半球形で、鈕座はない。鈕孔は底部の幅3.5mm、高さ3.0mmの円形を呈し、鈕孔設置面は鏡背面と同一の高さである。

無文の外区の内側に幅5.5mmの櫛歯文帯がめぐり、内区には径が約1.5mmの珠文が一列に25個施文されている。珠文の並びはあまり整然としておらず、特に写真下側の鈕孔周辺の珠文は円

が崩れ、右隣との間隔が広くなっている。珠文の内側には円圏がめぐり、その内部に半球形の鈕が設置される。両方の鈕孔付近で円圏に鋳崩れが認められる。

鏡面と鏡背面の凸部は丁寧に研磨されており、現在も鈍い光沢を放つ。鏡背面に赤色顔料が付着しており、特に櫛歯文帯に顕著である。



第１図　前組羽根倉遺跡出土鏡（左）と歴史と民俗の博物館所蔵鏡（右）（S=1/1）

３．歴民と民俗の博物館所蔵鏡（第１図右）

約４分の１が欠損しており、鏡面・鏡背面・破断面に錆が生じている。しかしながら、文様は非常に鮮明であり、錆に覆われていない箇所では銀白色の金属面を確認することができ、銅質・鋳上がりは良好である。復元面径は5.9cmである。錆のため精度に欠けるが、推定の厚さは内区が1.5～2.0mm、外区は2.0mmである。外区は平縁で、縁部の形態は錆のため観察できない。外区の反りは1.0mm程度で顕著ではないが、凸面鏡であると判断できる。鈕は径1.3cm、鏡背面からの高さが0.5cmの半球形で、鈕座はない。鈕孔は底部の幅3.5mm、高さ2.0mmの方形を呈し、鈕孔設置面は鏡背面と同一の高さである。

無文の外区の内側に幅4.5mmの櫛歯文帯がめぐり、内区には径約2.0mmの非常に立体的な珠文が一列に施文されている。配列はあまり整然としておらず、珠文の間隔にバラつきがみられる。珠文の内側には２重の円圏がめぐり、その内部に半球形の鈕が設置される。

錆に覆われていない箇所では光沢が確認され、鏡面・鏡背面の凸部は研磨で仕上げられたと考えられる。

4．前組羽根倉遺跡出土珠文鏡の位置づけ

前組羽根倉鏡と歴民所蔵鏡のように珠文が内区の主要な文様となっている鏡は「珠文鏡」と呼ばれる。では、前組羽根倉遺跡の珠文鏡はいつ、どこで作られ、どのような経緯でこの地にもたらされたのだろうか。以下では、珠文鏡に関する先行研究を整理し、それを踏まえ類例を検討することで、この問いについて考えていきたい。

(1)珠文鏡に関する研究史

内区に珠文が施される鏡を「珠文鏡」と呼ぶが、一口に「珠文鏡」と言ってもすべてが同じ文様をしているわけではなく、珠文の配列や外区文様にはいくつもの種類があり、それらが組み合わさって多様な様相を示している。また、全国から出土しておりその量は非常に多い。面径は多くが10cm以下に留まり、古墳時代の鏡のなかでも最も小さい系列のひとつである。

では、珠文鏡はいつ作られたのだろうか。かつて古墳から出土する小さな鏡は、大きな鏡が時を経て簡略化されたものであり、古墳時代のなかでも新しい時期に位置づけられてきた。したがって、珠文鏡も古墳時代中期以降に位置づけられてきたのである(小林行雄1965、樋口1979など)。しかし、出土遺構の時期を検討することにより、従来の変遷観よりも古い時期から面径の小さな鏡も出現している可能性が指摘されるようになった(森1970、小林三郎1979、東中川1975、今井1991など)。現在は、珠文鏡を含む小型鏡が古墳時代前期から存在していたという見解が共通となっている(森下1991、林2005、脇山2013、岩本2014など)。加えて、珠文鏡の出現が古墳時代前期でもより古い時期に遡る可能性も指摘されており、研究の進展によって珠文鏡の年代観は大きく変わったといえよう。

以上、見てきたように珠文鏡は古墳時代前期に出現し後期まで継続する長期的な系列である。そのような時期幅の広さが、先述した珠文鏡の多様性に反映されているのであろう。そこで、珠文鏡のなかでの前後関係を明らかにするために、各研究者によって分類・編年が検討されるようになった。各研究者で若干の相違はあるが、珠文が一列・二列、あるいは外区が無文・鋸歯文の珠文鏡が古墳時代前期に位置づけられる。さらに、古墳時代前期のなかでも、外区が無文のものが最も古く、その後に鋸歯文をもつ珠文鏡が出現するといった前後関係も指摘されている(森下1991、脇山2013、岩本2014)。

前組羽根倉遺跡の報告書が刊行されたのは1986年である。まさに、従来の変遷観が根強い中で、小さな鏡の出土時期が遡ることが明らかとなってきた時代であった。珠文鏡を表採した坂本氏はその年代を決めるにあたり、森氏(森1970)や東中川氏(東中川1975)の論稿に触れ、珠文鏡が古墳時代前期に遡ることは明らかであるとの見解を示している。そして、前組羽根倉鏡の類例として千葉県新皇塚古墳や福岡県宮ノ本遺跡出土鏡をあげ、それらと近似する年代を与えている(前組遺跡発掘調査団1986)。外区が無文で一列の珠文をもつ前組羽根倉鏡を古墳時代前期に位置づける坂本氏の見解は、現在の編年案でも矛盾をきたさない。一方で、研究の進展に伴い新たな問題も生じている。それは、前組羽根倉鏡のような珠文鏡が古墳時代前期のなかで

もどこまで遡りうるのか、という問題である。

では次に、珠文鏡はどこで作られたのだろうか。古墳時代の鏡には、日本列島で作られたものと、中国大陸で作られ日本列島に持ち込まれたものがある。珠文鏡は一部が韓半島から出土するが、その大半は列島内であり日本で作られた鏡(以下、倭製鏡)であると考えられている。倭製鏡の生産は古墳時代前期に始まり、40cmを超えるものから10cm以下ものまで多様な面径・デザインの鏡が作られる。それらは文様や高い鋳造技術の共有から、限定的な生産体制が想定されており、分布のあり方からその管理主体は近畿中央政権であったというのが現在の共通見解となっている。しかし、珠文鏡のような非常に小さな鏡群については見解が分かれるところである。ひとつは、他の倭製鏡と同様に近畿中央政権の管理下での限定的な生産体制を想定する見解である(今井1991、脇山2013)。もうひとつは、限定的な生産体制ではあるが、近畿中央政権以外の管理主体を想定する見解である(小林三郎1979、楠元1993)。最後は、各地での分散的な生産を想定する見解であり(林2005)、議論が続いている。

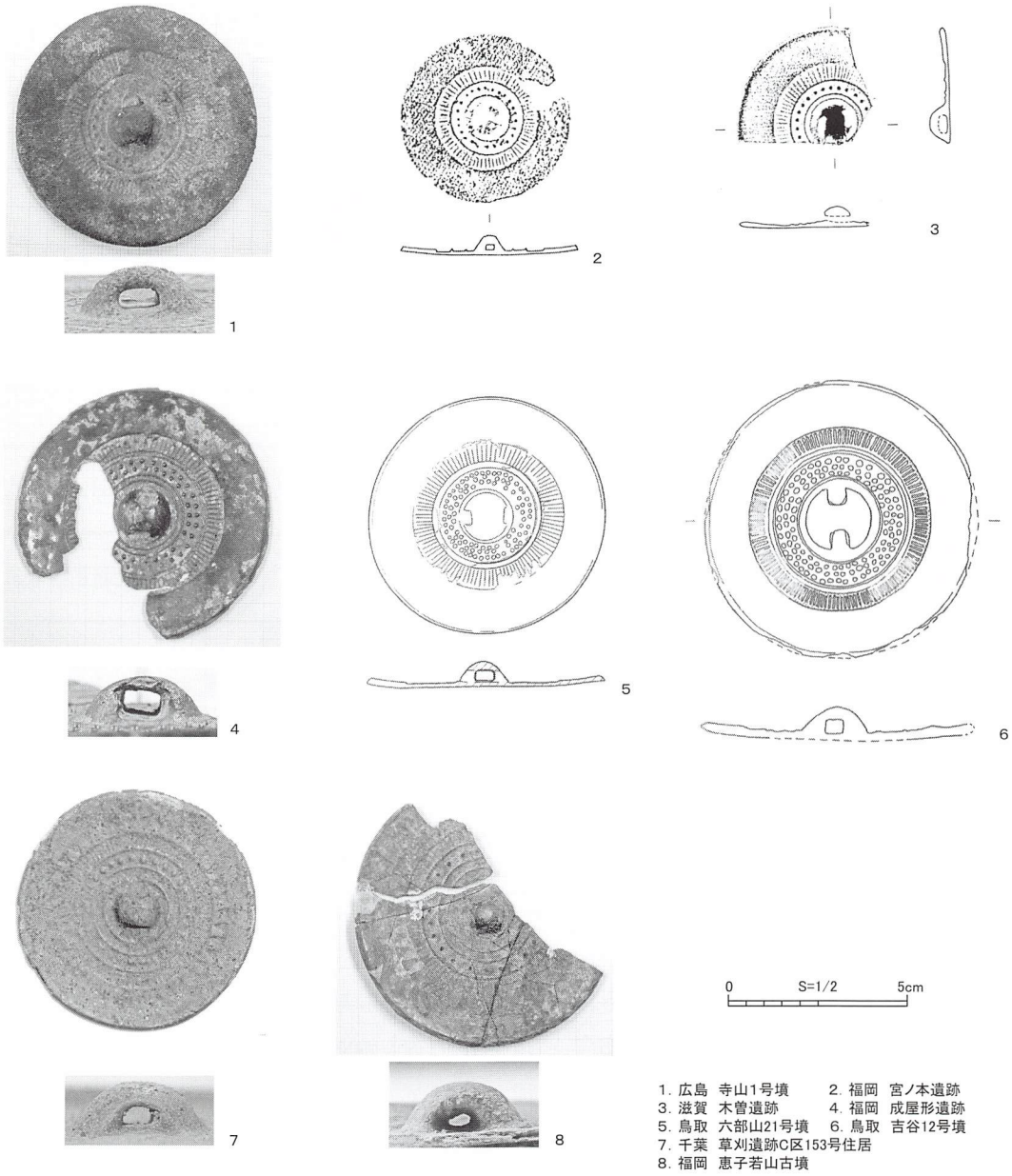
(2)前組羽根倉鏡の類例と前期珠文鏡

前組羽根倉鏡や歴民所蔵鏡と同様に一列の珠文で外区が無文の珠文鏡を図2の1～3に示した。全国では24面確認されている。これらは文様構成だけではなく、鈕孔形態や銅質・鋳上がりといった技術的な属性にも共通点がみられる。倭製鏡の鈕孔形態は方形と円形・半円形に大別されるが、一列の珠文で外区が無文の珠文鏡の鈕孔形態は大半が方形である。前組羽根倉鏡のような円形鈕孔は例外的であり、現在確認しているなかでは千葉県花前Ⅱ-1遺跡出土鏡と合わせて2面のみである[1]。また、銅質や鋳上りは原材料の配合比や鋳造技術に起因する属性である。正確な分析には理化学的な手法が必要とされるが、色調などの観察による良・不良の判別も一定の有効性はあると考える。一列の珠文で外区が無文の珠文鏡は、色調が黒鉛色や銀白色を呈し銅質が良好な資料が多い。さらに、文様は明瞭に鋳出され、鋳造技術の精巧さがうかがえる。特に、歴民所蔵鏡は錆で覆われているにもかかわらず文様は立体的に鋳出されており、金属面が露出している箇所では銀白色の輝きが確認できる。

次に、外区は無文であるが珠文が二列以上ものを第2図4～6に提示した。全国で17面を確認している。前組羽根倉鏡や歴民所蔵鏡とは珠文の配列が異なるが、鈕孔形態は確認できるすべてで方形であり、銅質や鋳上がりも良好な資料が多い。つまり、外区が無文の珠文鏡は珠文の列数に関わらず共通の技術的特徴を有していると言える。

一方で、前組羽根倉鏡と同時期の古墳時代前期には外区に鋸歯文をもつ珠文鏡もある(第2図7・8)。ここから、古墳時代前期において外区が無文の珠文鏡をA群(第2図1～6)、鋸歯文のものをB群(第2図7・8)とし、これまで着目してきた鈕孔形態と銅質・鋳上がりについて両者を比較したい。A群は41面、B群は27面を集成している。まず、鈕孔形態であるが、A群では方形鈕孔が大半であるのに対し、B群は円形・半円形が多い傾向にある(第3図)。また、銅質や鋳上りは、A群が良好な資料が大半であるのに対し、B群では濁った黄緑色を呈し非常にもろい資料が多い。ただし、B群でも銀白色を呈する良好な資料が確認でき、多様な様相を示している。

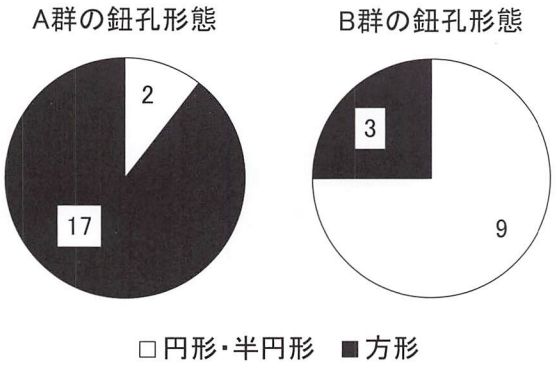
以上から、外区が無文の珠文鏡(A群)と鋸歯文をもつ珠文鏡(B群)は文様だけではなく製作



第２図　前期珠文鏡 (2)

技術においても異なる傾向を示すことが分かった。そして、先行研究では外区が無文のものが鋸歯文をもつものよりも古い可能性が指摘されている(森下1991、脇山2013)。改めて、A群とB群の出現時期を出土遺構の時期から検討したところ、A群では京都府馬場遺跡出土例が古墳時代初頭で最も古い。他にも、鳥取県六部山21号墳出土鏡など古墳時代前期前半の遺構から出土する事例が散見される。前組羽根倉鏡は前述した採集の状況より出土遺構を確定させることは難しいが、方形周溝墓からは古墳時代前期前半の土器が出土しており、鏡の時期を考える参考になる。一方で、B群では東京都砧中学校７号墳など古墳時代前期後半からの出土例が最も古く、A群のように古墳時代初頭まで遡る資料はみられない。このようなA群とB群の出現時期の違いは先行研究の指摘を追認する結果となった。

ここまでの比較結果を第４図にまとめた。様々な相違点をもつA群とB群の関係については、珠文鏡以外の前期倭製鏡全体を踏まえて検討する必要がある。それは別稿に譲り、ここからは前組羽根倉鏡を含むA群に限定して考察を進めたい。



第３図　鈕孔形態比較

	外区	鈕孔形態	銅質・鋳上がり	出現時期
珠文鏡A群	無文	方形主体	良好	古墳時代初頭
珠文鏡B群	鋸歯文	円形・半円形主体	良好／不良	古墳時代前期後半

第４図　前期珠文鏡A群とB群

（３）前期珠文鏡Ａ群の生産と流通

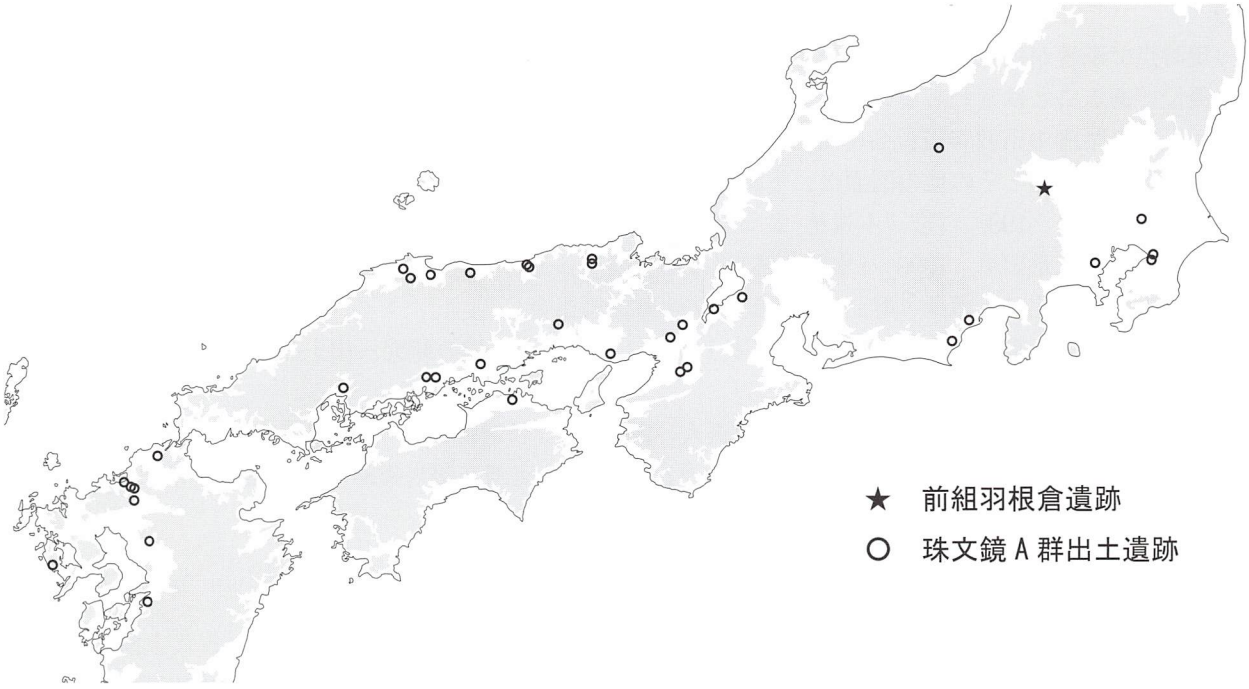
A群の出現時期は前述したとおり古墳時代初頭である。さらに、古墳時代前期前半の遺構からの出土が多いことや古墳時代中期以降に下る資料がほとんどないことから、製作時期の主体は古墳時代前期前半にあり、少なくとも前期のうちに生産は終了したと考えられる。

また、前項で見たような鈕孔形態や銅質・鋳上がりといった技術的属性の共通性から、各地域でそれぞれ製作するような分散的な生産体制ではなく、一定の管理下のもとで製作された限定的な生産体制が想定される。また、第５図に珠文鏡A群の分布図を示した。分布は九州から関東までの広域に及んでおり、各地域が、珠文鏡A群の生産・流通に関与していた地域との関係のなかで鏡を入手した状況を想定することができる。

具体的な製作地は、鋳型が発見されていないため当時の銅鏡・青銅器生産のあり方との関係から考察しなければならない。今回取り上げた前組羽根倉遺跡は、現在の考古資料の状況からは近隣で銅鏡を生産した可能性は考え難い。また、第５図で示した分布からも前組羽根倉遺跡周辺が珠文鏡A群の製作地であった可能性は低く、遠隔地との関係のなかで入手したものと考えられる。

５．おわりに

ここまで、前組羽根倉鏡と歴民所蔵鏡を紹介し、古墳時代前期の珠文鏡の生産と流通について若干の考察を行った。前組羽根倉鏡と歴民所蔵鏡を含む珠文鏡A群は古墳時代初頭から製作が開始され、列島各地に分布する。その生産は各地で分散的に行われたのではなく、ある限定



第５図　前期珠文鏡A群の分布

的な地域で生産され各地に流通したと考えられる。前組羽根倉遺跡で方形周溝墓を営んだ人々も、他地域との関係のなかで銅鏡といった希少な器物を入手したのであろう。珠文鏡A群の生産が開始される時期は、近畿地方を中心に大型の前方後円墳が作られ始める時期であり、それ以前の地域間関係や器物の流通のあり方が大きく変容する時期である。そのなかで、珠文鏡A群が製作された意義を改めて考える必要がある。そのためには、当時列島で流通していた他の銅鏡の動向や銅鏡以外の器物、それらが媒介となる地域間関係の動態と合わせて考察しなければならず、今後の大きな課題としたい。

埼玉県では古墳時代の銅鏡の出土数が他県に比べて多くはない。さらに、大型の鏡はあまり見られず、小型の鏡が多い。しかしながら、今回取り上げた２面のように面径が10cm以下の小型鏡でも、当時の社会を考えるうえで非常に重要な考古資料である。筆者の力不足から多くの論点を残してしまったが、これからも資料の観察と集成を継続しその成果を公表していきたい。

本稿は、平成27年度九州史学会大会考古部会にて口頭発表を行った内容の一部をもとに執筆したものである。また、資料の調査や掲載につきまして、下記の諸機関に便宜を図っていただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

九州大学考古学研究室、埼玉県立歴史と民俗の博物館、千葉県教育委員会、広島県府中市教育委員会

《註》

（1）現時点で筆者が鈕孔形態を確認できていない資料もあり、今後増加する可能性も考えられるが、方形が優位であることは変わらないと考える。

（2）1（広島県府中市教育委員会所蔵）、4・8（九州大学考古学研究室所蔵）、7（千葉県教育委員会所蔵）は筆者撮影。その他の図面は、下記の報告書から引用した。

2　山本信夫　1980　『宮ノ本遺跡』太宰府町の文化財第3集　太宰府町教育委員会

3　堀真人・重岡卓　1999　『木曽遺跡Ⅲ』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

5　高田健一・東方仁史　2013　『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究－出土品再整理報告書－』鳥取県立公文書館県史編さん室

6　濵隆造・下江健太・大川泰広・浜田真人　2003　『吉谷遺跡群』　一般国道180号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　鳥取県教育文化財団調査報告書84　財団法人鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター

《参考文献》　※紙面の都合上、報告書は割愛させていただきました。

今井堯　1991　「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡－小形倭鏡の再検討Ⅰ－」『古代吉備13

岩本崇　2014　「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳」『兵庫県香美町村岡文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会編

楠元哲夫　1993　「古墳時代仿製鏡製作年代試考」『大和宇陀地域における古墳の研究』

小林三郎　1979　「古墳時代倣製鏡の一側面－重圏文鏡と珠文鏡－」『駿台史学』46

小林行雄　1965　『古鏡』

塩野博　2002　「埼玉県出土の銅鏡－古墳時代を中心として－」『埼玉県立博物館紀要』27

林正憲　2005　「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集』

東松山市教育委員会　2015　『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山発表要旨資料』

東中川忠美　1975　「珠文鏡について」『恵子若山遺跡』

樋口隆康　1979　『古鏡』

前組遺跡発掘調査団　1986　『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』

森浩一　1970　「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論攷』

森下章司　1991　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6

脇山佳奈　2013　「珠文鏡の研究」『史學研究』279